木曽三川 歴史・文化の調査研究資料

KISSO

2015 夏
Vol.95
平成27年

地域の歴史
長良・揖斐川に挟まれた
水郷の地・瑞穂市（旧巣南町）

地域の治水・利水施設
扇状地末端部と
低湿平坦地に形成された三輪中

歴史記録　流水を制御する水制　第一編
古代の水制とその成り立ち

研究資料　弥富市教育委員会　社会教育課　歴史民俗資料館　学芸員　伊藤　隆彦
故郷を愛した漢詩人　服部擔風

長良・揖斐川に挟まれた水郷の地・瑞穂市（旧巣南町）

瑞穂市の西部・旧巣南町地域は、美濃国において稲作の先進地域のひとつでした。また近世では、中山道の美江寺宿にて、皇女和宮が下向のおり、揖斐川を渡る呂久の渡しで、「落ちて行く　身と知りながら　もみじばの　人なつかしく　こがれこそすれ」と歌を詠んでいます。

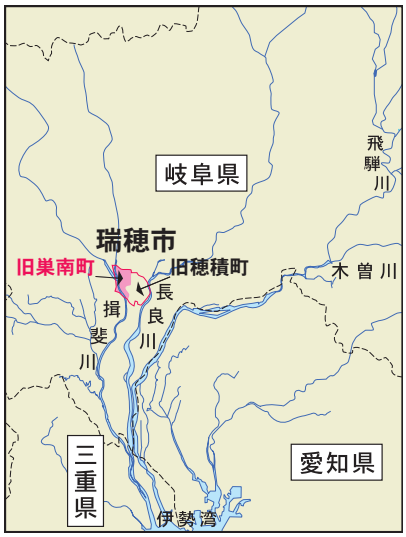
瑞穂市西部の旧巣南町

濃尾平野の北西部、岐阜市と大垣市の間に位置する瑞穂市は、市の西側を根尾川と揖斐川が流れ、東側を長良川が流れている低湿平坦な輪中地帯です。両大河の間を五六川・犀川・長護寺川が南流し、長良川に注ぎます。瑞穂市は、平成一五（二〇〇三）年五月に本巣郡穂積町と同巣南町が合併してできた市で、今号では市の西側にあたる旧巣南町地域の歴史を主に触れていきます。

当地域は、根尾川が造った扇状地の末端部にあたる三角州地帯で、細かい土砂が堆積した平坦部で湧水が多く、水田の開拓が容易な地域でした。このため、濃尾平野の中でもいち早く人が定住し稲作を行った地域の一つと考えられ、居倉・重里地区で弥生式土器の破片が出土しています。さらに、巨大な前方後円墳である居倉大塚や、重里の七塚と称される古墳群の存在が、当地の先進性を物語っています。

その後の歴史から見ても、同様なことが知れます。「垂仁天皇紀（日本書紀）」や「倭姫命世紀」に、皇女倭姫命が、天照大神をお祀りするのに最もふさわしい地を求めて大和から伊賀・近江・美濃等の諸国を巡り、伊勢神宮に至るまでに、各地で一時的に天照大神をお祀りしたという記述があり、その中に「美濃の伊久良河宮」の名があります。居倉の天神神社が伊久良河宮の跡で、境内には古代の祭祀遺跡で、神の宿る石という意味の御船代石が祀られており、神獣文鏡などの祭祀遺物が出土しています。

この伝承は、当地域が古代美濃国の拠点であり、その象徴として美江寺が建てられました。さらに律令制の下では、一七条・一八条などが地名として残っており条理制の存在を示しています。



旧巣南町

天神神社（伊久良河宮跡）

中世の美江寺

養老三（七一九）年、元正天皇の美濃行幸中に、伊賀国名張の坐光寺から十一面観音像を当地十六条村へ移して、美江寺が創建されたとされます。

中世の美江寺は、国司源美濃守国房が寺領を寄進して以来、末裔である土岐氏が代々崇敬してきました。室町時代前期には土岐頼員が齋田村（安八郡神戸町）を寄進し、美濃国守護土岐持益は、文明二（一四七〇）年に美江寺で剃髪得度したと伝わっています。ついで土岐成頼が永正二（一五〇五）年に幕下の十六条城主和田佐渡守に修繕を命じ、堂塔・諸院の二四箇所を再興したと云われています。

その後斎藤道三が、天文一一（一五四二）年には土岐氏を放逐して美濃国を手中に収めました。斎藤道三は、同年九月には土岐氏に臣従する十六城の和田氏を攻め

中山道美江寺宿跡

滅ぼしました。このため、土岐氏の庇護を受けていた美江寺は稲葉山（岐阜）城下に移されました。

美江寺宿と和宮降嫁

江戸時代の美濃国は、多くの領主が分割支配しており、「正保郷帳」によれば、当地域は、十七条村一、〇三三石が尾張藩領、呂久・中宮・宮田・大月・森の五ケ村二、五七〇石が大垣藩領、美江寺村八九八石が加納藩領で、ほかに幕府直轄地（明和年間以後は大垣藩領）が古橋・十五条・十八条などで二、〇〇〇石余、旗本領が居倉・横屋・北脇・堤・田ノ上・東座倉・三日市場・一ツ木・唐栗・北脇などで三、七〇〇石余となっていました。しかし、この中でも美江寺村は江戸時代を通して、加納藩領→幕府直轄地→加納藩領→幕府直轄地→大垣藩領と変遷しました。

天正元（一五七三）年以降、昔の東山道が南に移り、赤坂→呂久→美江寺→河渡→加納への新路が開かれ、江戸幕府がこれを整備して中山道としました。宿場は、当初赤坂宿から河渡宿でしたが、寛永一四（一六三七）年に美江寺宿を設置し伝馬二五匹を常備しました。この宿は、赤坂・河渡の宿との距離が短く、泊まりの需要が少ない宿であり、寛文五（一六六五）年の記録では、家数七五軒で茶屋・旅籠もなく宿場の機能を果たしていませんでした。本陣が置かれたのも、宿場開設から三二年たった寛文九（一六六九）年で、加納藩によって建設されました。その後は、旅籠も一〇数軒が営まれましたが、その数は時代によって増減が多く不安定で、宿場の経営は困難を伴いました。

江戸時代を通して、禁中・公家が経済的な援助を期待する一方、武家は官位の昇進を願って、両者の間で縁組が行なわれ、多くの宮家や公家の姫君が江戸に降嫁しています。姫君の下向には、専ら中山道が使われました。これは、東海道は往来が多いこと、海路があること、河川の氾濫のおそれがあること、また駿河国にある「薩埵峠」や「縁切坂」の地名が不吉として避けられたとも言われています。姫君の通行は数百人の大行列で、その都度、宿場は人馬継立の供出や建物・橋の修繕など多大な出費を負担することとなりました。中でも文久元（一八六一）年、公武合体のために孝明天皇の妹、和宮が将軍徳川家茂に嫁いだ下向の列は、前後四日間に及ぶかつてない大規模なものでした。

呂久の渡し跡

当地の南西部に位置する呂久の渡し（呂久村）は、揖斐川を通過する要所でした。天正八（一五八〇）年、織田信長は、渡船のため呂久村を諸役免除としました。この方針は続く権力者に引き継がれ、中山道が整備された際も呂久村が揖斐川の渡船場となりました。和宮も、文久元（一八六一）年一〇月二六日に大垣藩が用意した御座船で呂久の渡しを渡りました。この時、船中から東岸の屋敷の庭に色鮮やかに紅葉した楓を見て、その美しさに感懐を托して、

「落ちて行く　身と知りながら
もみじばの　人なつかしく　こがれこそすれ」

と一首を詠まれました。

幕末動乱の時代を生きた和宮の遺徳を偲んで、昭和四（一九二九）年に呂久の地に歌碑（東伏見宮妃周子の筆）が建てられ、周囲を日本庭園として整備し、小簾紅園と称しました。これは、和宮下向道中で唯一の御旧蹟で、楓が多く植えられ紅葉の名所ともなっています。

農業の近代化が進む瑞穂市

平成一五（二〇〇三）年五月に穂積町と巣南町が合併してできた瑞穂市は、古来からの稲作先進地ですが、近年の米の生産調整によって、柿、梨などの果樹や都市近郊の有利性を活かした施設農業に転換され、いちごや花卉の栽培が盛んに行われるようになってきました。

全国の甘柿の中でも最優秀品種として有名な「富有柿」は、瑞穂市（旧巣南町）が原産地です。居倉に原木が残っており、市の天然記念物になっています。花卉生産は、昭和五三（一九七八）年に切りバラ施設の団地化を図ったのが始まりで、市内北西部の数箇所に省エネモデルの温室団地が整備され、花づくりの近代化が図られてきました。この他にも、サボテン、洋ラン、シクラメン、カランコエなどの鉢物やバラ苗を生産する農家もあり、岐阜県下でも屈指の花卉産地となっています。

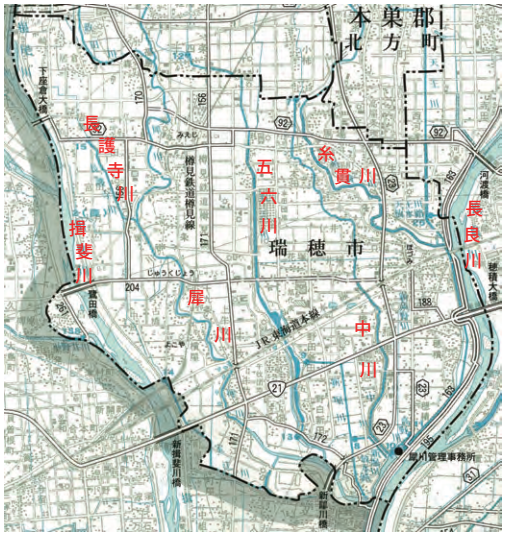
富有柿の原木

■参考文献
『巣南町史』　巣南町　昭和五三年
『岐阜県の地名』　平成元年　平凡社
『日本地名大辞典・岐阜県』　昭和五五年　角川書店

地域の治水・利水施設

扇状地末端部と低湿平坦地に形成された三輪中

根尾川・揖斐川と長良川に挟まれた瑞穂市は、市内を中小河川が乱流する水郷地帯で、人々は輪中堤を築いて洪水を防御しました。それが、五六輪中・古橋輪中・七崎輪中の三輪中です。



岐阜県土木事務所管内図に加筆

瑞穂市内を流れる河川

瑞穂市は、揖斐川と長良川に挟まれ、両川の堆積土砂によって形成された扇状地の末端部と、それに続く低湿平坦地帯で、糸貫川（後に廃川となる）・五六川・中川・屋川などが蛇行して流れています。北部の扇状地末端部では、伏流水が湧出し中小河川となり、肥沃な平坦地と豊富な水の恵まれた水郷をつくり、稲作の好適地でした。一方、河川氾濫など水害が多発する洪水常襲地帯でもありました。

長良川と揖斐川の間を流れる中小河川は次の通りです。

・糸貫川

昭和二五（一九五〇）年に廃川になる前は、本巣市を南流し、本巣郡北方町を経て、生津で長良川に流入する流路延長約一一kmの河川でした。

現在の糸貫川

・五六川

本巣市南部の湧水を集めた戸泉川と赤瀬川、屋川が合流し、その後、長良川に合流する流路延長約七・五kmの河川です。長良川と揖斐川の間で最も低地を流れるので、長良川が増水すると逆流して氾濫しました。

・中川

本巣市宗慶や小柿などの湧水を集めて南流し、下穂積と祖父江の間で長良川に合流する流路延長約八kmの河川です。

・屋川

本巣市下真桑の湧水を源に南流して、野白の南で五六川を合わせ長良川に注ぐ流路延長約一三kmの河川です。

・長護寺川

木曽川上流改修（大正改修）以前は、七崎に源を発し古橋の西南端で揖斐川に注いでいました。改修工事で揖斐川合流部は締め切られ、古橋の北端で屋川に切り替えられました。

三輪中の形成

当地域の水害は、宝暦治水（一七五四～一七五五）以後増加しており、下流域での河川改修が上流の治水に影響していました。こうした洪水を防御し、さらに地区内の後背湿地を開拓するために、輪中堤が築造されていきました。

以下に、五六輪中・古橋輪中・七崎輪中の詳細を示します。

・五六輪中

東南部を長良川右岸堤、東北部を糸貫川右岸堤、西部から南部を屋川左岸堤によって囲まれた輪中で、北部は堤防のない「明所」となっていました。輪中堤が築かれる以前の地形を大まかに捉えると、東に長良川・糸貫川の自然堤防があり、西を屋川自然堤防があって、その間の後背湿地に湧水を集めた中川と五六川が流れていました。上位部の扇状地末端部で大量に湧出する湧水の円滑な排水と、長良川の水位が上がると逆流によって氾濫する中川・五六川の洪水防御がこの輪中の課題でした。

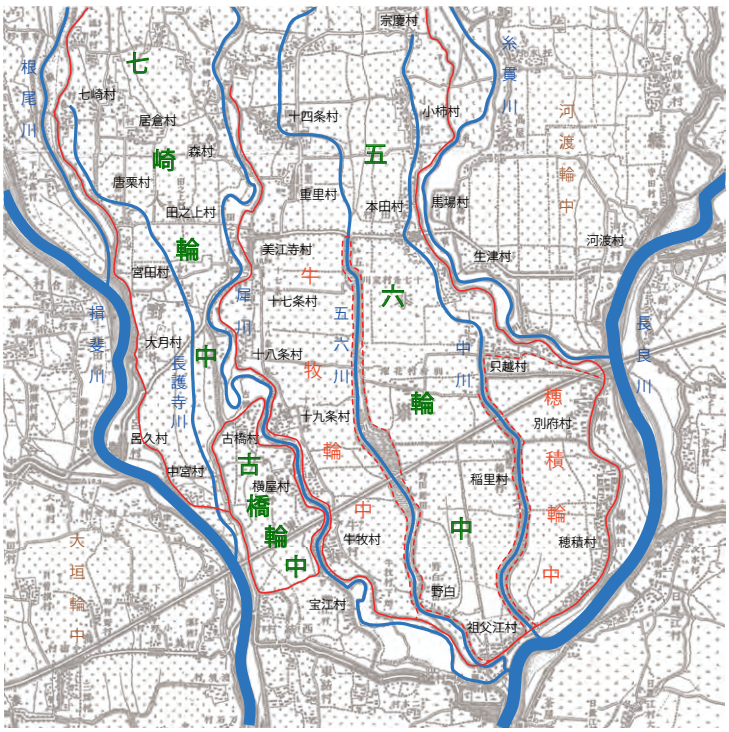
宝永二（一七〇五）年の絵図に、輪中形成の過程が見受けられます。長良川・糸貫川右岸に上真桑村付近から穂積村までの堤防が記され、さらに、中川との間に穂積村と中川以東の別府・只越村を囲む掛廻堤が記されており、穂積輪中が形成されています。

中川と屋川間では、牛牧輪中が形成されていきました。屋川の左岸一四条村（本巣市）付近から宝江村付近に堤防が見られます。中川と五六川の間は後背湿地で、高位部から流れる湧水を一時的に留める湧水地となっていました。この地域が江戸時代になって開拓が進み、新田が成立しました。こう

五六閘門（逆水樋門）

した新田を水害から守るには、洪水時に長良川から逆流した水が氾濫しないように逆水樋門を設置することと、上位部の水が流入しないように五六川の両岸に築堤したり、川と直角に横堤を築くことでした。

逆水樋門の設置には、下流の墨俣輪中からは障害となることから反対が起こりましたが、幕府直轄地の本田陣屋に代官として赴任した川崎平右衛門が、墨俣輪中を説得して、宝暦七（一七五七）年に五六川逆水樋門を設置しました。平右衛門の樋門設置と地元の村々による附帯工事は、上流の村々の反対を押し切り、五六川護岸堤を右岸では一七条村まで、左岸では上本田村（旧穂積町）まで築堤しました。この時点で、中川の右岸堤もできていたとすると、牛牧輪中の形成はほぼ終わっていたことになります。



想定輪中位置図　※赤線は輪中堤（明治期地形図に加筆）

川崎平右衛門供養塔

牛牧輪中は、天明八（一七八八）年に中川逆水樋門が設置されたことで、穂積輪中とひとつの輪中になりました。当時は牛牧輪中を名乗っていましたが、明治になってから五六輪中と称するようになりました。

・古橋輪中

揖斐川・根尾川の扇状地の末端部にあたり、北から東を犀川右岸堤、北西部を長護寺川左岸堤、西南部を揖斐川右岸堤によって囲まれています。また南部の一部では、結輪中堤に依存しています。犀川は、古くは根尾川の旧流路とされ、古橋輪中の集落は犀川の自然堤防上にありました。

輪中の成立過程を正確に示す史料はありませんが、犀川については、五六輪中で触れた宝永二年の絵図で右岸も一四条村から美濃路（結輪中堤）まで堤防が続いています。さらに輪中の輪頂部で、犀川右岸堤から長護寺川左岸堤に続く堤防も描かれています。揖斐川左岸は絵図に入っていませんが、周囲の状況から堤防があったと推察されています。

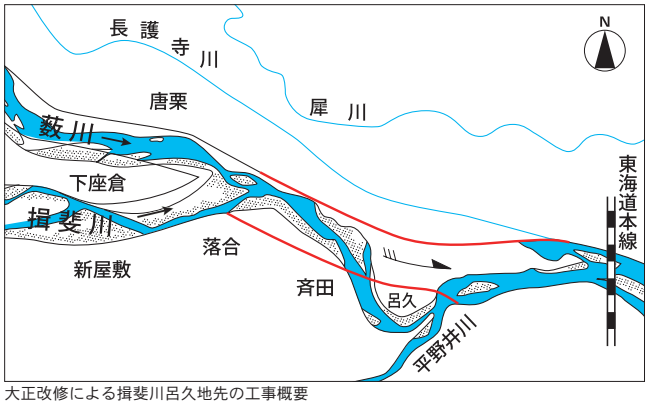
従って、古橋輪中の掛廻堤は、宝永二年の時点では完成していたことになり、また、南部で結輪中堤を借堤しているので、結輪中の築堤以降であったはずです。

・七崎輪中

七崎輪中は、明治一六（一八八三）年五月に「七崎輪中水利土功会」が結成された時点で成立していましたが、いわゆる掛廻堤によって区域を囲む形にはなっていませんでした。西を流れる根尾川・揖斐川の七崎から中宮までの堤防を輪中堤としています。

また輪中の東限は、犀川とする資料もありますが、輪中経費の村別負担には犀川東岸の美江寺ほか三ケ村も参加しています。このように、七崎輪中は、根尾川・揖斐川の堤防を守るだけの水防組織であったと言えます。

七崎輪中は、木曽川上流改修工事で大きく変貌しました。唐栗・東座倉付近の根尾川の屈曲部が改修され、揖斐川が大きく湾曲していた呂久では直線的な新河道を開削し、呂久は揖斐川右岸となりました。



大正改修による揖斐川呂久地先の工事概要

■参考文献
『巣南町史』　巣南町　昭和五三年
『岐阜県の地名』　平成元年　平凡社
『日本地名大辞典・岐阜県』　昭和五五年　角川書店
『輪中―その形成と推移』　安藤萬壽男　昭和六三年

流水を制御する水制

第一編

古代の水制とその成り立ち

都江堰の蛇籠と聖牛（『信玄堤』より）

一．はじめに

明治改修以降、ケレップ水制や杭出し水制が木曽川下流部に多数設置され、これら水制は豊かな河川景観を創出しています。また、御囲堤の堤外地であった扶桑町草井や対岸の各務原市前渡西町の各周辺では、江戸時代に構築された猿尾が残存しており、先人の川との戦いの歴史を今に伝えています。

本シリーズでは、木曽三川下流域でのケレップ・杭出し水制や猿尾等が設置された経緯や現状について触れる予定ですが、まずは本編で、わが国の堤防構築と河川構造物の歴史を概観します。

二．古代の堤防建造

古く中国では、盛土で堤等を築く際、土の中に木の枝や葉を混入させて盛土の締固めを容易にしたようであり、この敷葉工法が朝鮮半島を経てわが国にも伝わったと考えられています。なお、敷葉工法は敷設する素材によって「散草法」や「敷粗朶工法」と呼ばれますが、その目的は同じと考えられますので、以下には敷葉工法と記しています。

（一）安豊塘

中国安徽省の安豊塘（灼陂）の建設は春秋時代の紀元前五九八から五九一年とされ、現在も使用されている最も古いものであり、現在の堤防長は二五km、湖水面積三四平方km、貯水量一億立法m、灌漑面積一四万haです。

安豊塘の堤は、後漢時代七〇年前後の修築の際、盛土の過程で樹木の葉や小枝（粗朶）を水平位に敷き詰めた敷葉工法によって造られました。

なお、紀元前三六〇から二五〇年に築造された都江堰（四川省都江市）築造に際して、蛇篭と聖牛が使用されていました。

（二）碧骨堤

全羅北道の東津江域に位置する碧骨堤が四世紀前半（三三〇年）百済で造られた韓国最大の古代貯水池であり、現地には、南北約三kmの堤が残っています。

堤防の最下層は敷葉層であり、草本類が敷き詰められており、敷葉層は堤防に盛土を施す前の最初の工程でした。草本類の最大厚さ約一五cmの敷葉層が、道具を利用して押し固められた痕跡が観察されます。

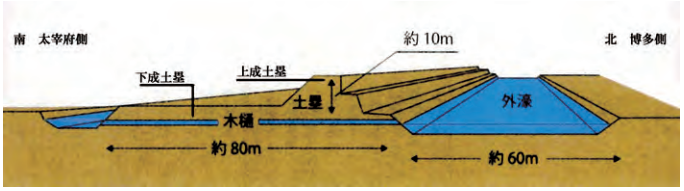
（三）わが国での敷葉工法

盛土に草本を敷設する事例は、弥生時代から見られるようです。

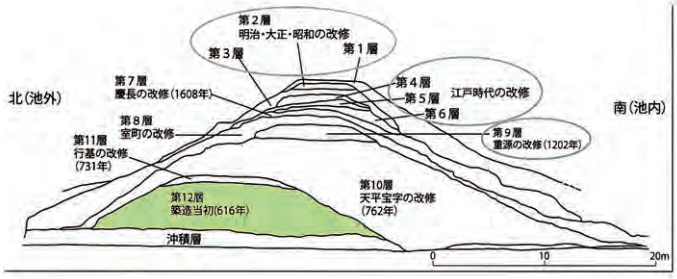
金盛弥らは、盛土補強工法としての敷葉工法の効果について、透水試験で敷葉によって砂程度の排水能力が維持されることを確認し、圧密促進効果に関する実験で、圧密荷重が作用した極めて初期の段階での敷葉による排水効果を認めています。さらに、実際の法面観察によって、敷葉の存在が雨水によるガリ浸食を抑制している状況を確認しました。つまり、盛土補強工法の敷葉工法は現代の「ジオテキスタイル（繊維シート）工法」や「フィルタードレーン工法」であると言えるでしょう。

六六四年に築造された大宰府の防衛土塁・水城跡は敷葉工法で築かれており、土塁は基底部幅八〇m、高さ約一〇m程度で、博多湾側に幅六〇m、深さ四mの堀を造り、水を貯えたと言われています。

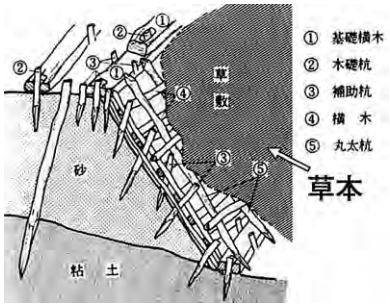
土塁は、下成土塁と上成土塁の二層から成り、下成土塁の下層には軟弱地盤を補強するために敷葉工法で造られていました。



水城断面図（『特別史跡水城跡』より）



敷葉工法(草色)による
狭山池北堤断面図
(『狭山池の誕生をさぐる』より)



久宝寺北遺跡の低水路護岸
(『古代と現代の治水』より)

三、草本を用いた川の構造物

(一) 稲作と井堰

稲作の証拠(イネ科植物の葉などの細胞成分)は、縄文時代前期の地層からも出土しており、弥生時代には、中国大陸の揚子江流域および朝鮮半島から伝来した水田稲作農耕が行われていました。

稲作には灌漑用水が不可欠であり、弥生時代の水田遺跡からは、木材で造られた貯水用や用水路・流路等の流向を変える井堰が見つかっています。

(二) 畿内の開発

大阪府域の弥生時代前後の遺跡は、当時の河内湖沿岸、北からの旧淀川・南からの旧大和川流域に集中しており、河川が運んだ肥沃な土と豊かな水を背景に、早くから稲作文化が定着しました。

以下に、草本を用いて築造された大坂周辺で出土した堤防の概略について触れます。

①久宝寺北遺跡の堤防

八尾市久宝寺北遺跡で出土した低水路護岸は、五世紀中頃から六世紀までに構築されたものと考えられます。

自然砂の岸を削り出した堤防法面は木組みで押え、草本を敷き、粘土で覆われていました。

また、堤防天端と法面の骨組を粘土・シルトで被覆して、この上に草を敷き、さらに河川の浸食による骨組内部の土砂の流失を防止するために補助杭を打ち込み、背面にも杭を打ち込んでいることが観察されました。

②亀井遺跡の堤

八尾市の亀井遺跡の堤は、五世紀末から六世紀初めに河内湖からの逆流水を防ぐために造られました。堤防敷約一〇m、天端幅約六m、高さ約二mのこの堤は、堤の表と裏の両端に杭を打ち、基底部に草本・樹皮を敷設した敷葉工法で、粘土を築堤材料としていました。

③狭山池の北堤

狭山市の狭山池は、古事記、日本書紀にも登場するわが国最古の溜池で、狭山池の北堤は六一六年頃に築造されたと推定されています。

狭山池は、枝葉層を利用して盛土の余分な水を排水し、盛土の圧密を早めており、この様な排水補強を促進する敷葉工法は、狭山池が最初でした。

④五反島遺跡の堤防

平安時代に構築され鎌倉時代まで機能した吹田市の五反島遺跡の堤防は、長さ約五四m、天端幅一・六から二・四m、堤防敷九・〇から一二・二mでした。

この堤防は、河床勾配や流量が大きく異なる二河川の合流点での土砂堆積と合流点での出水時の背水現象を排除するため、合流点を下流に移動させる背割堤の機能を担っていました。

堤防構造は、合流地点の砂層を主とする自然堆積を利用して両側の法面に杭、横木などを配し、その間に小材や小枝等を組み込むと共に、一部で上面を樹や小枝などが混入した粘土やシルト層で覆っていました。

(三) 古代の水制

治水や灌漑工事では、護岸工事と水制工事が連携して行われ、護岸工事の遺構と共に水制遺構も出土しています。

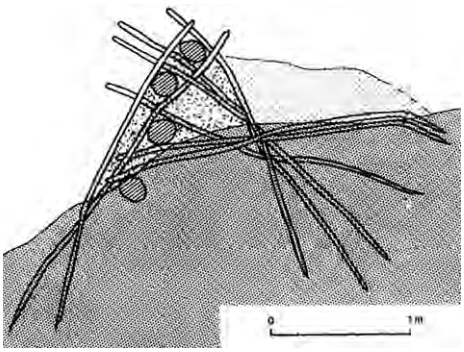
自然河川に設置された井堰が、水制の機能をもたらした例を以下に挙げてみます。

①古照遺跡の井堰

愛媛県松山市西郊にある古墳時代の四から五世紀頃に造られた古照遺跡から、幅一三m(堰材五〇〇本以上)、二四m(堰材ほぼ千本)、八mの三基の用水確保のための井堰と取水口の遺構が出土しました。

その構造は、杭を斜めに打ち込んで横木をこの列上に置いた後、横木を固定するために再び杭を斜めや垂直に打ち込み、合掌形式としていました。木組みの数ヶ所は藤ヅルで縛り、隙間には粘土や礫などを詰め、草などの編物(蓆)で押さえて堰き止め、水位を上昇させる機能を高めていました。

これら井堰前面を編物(蓆)状のもので流れを遮断して取水路に導流する手法は、例えば昭和年代にも、坂井市丸岡町の九頭竜川の旧鳴鹿大堰の越中三叉で使用されていたようです。

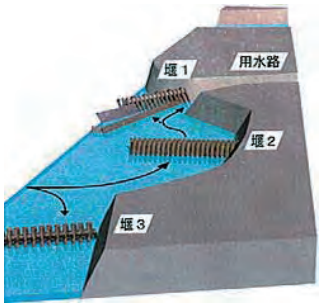


左:古照遺跡の井堰の横断実測図(『古照遺跡』より)
右:越中三叉(背後に廃線になった京福永平寺線の鳴鹿鉄橋、建設中の旧鳴鹿堰堤)(鳴鹿堰堤土地改良区連合蔵)

②岩屋遺跡

兵庫県伊丹市の岩屋遺跡で、弥生時代前期の蛇行する自然河川跡

津寺遺跡の護岸木組み（『連載第12回 平安時代の堤防調査日誌』より）



岩屋遺跡の井堰と用水路の模式図（現地説明会資料、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所）

とその護岸施設や、井堰三基と用水路などの灌漑施設が出土しました。

これら三基の内、堰一は長さ六・〇m、最大幅三・〇mで、上流からの流れを、用水路（長一〇〇m、幅二〇m、断面V字形）の方向に変えていました。また、堰の前面には蓆状の敷物や草本を何枚も貼り付けていました。

（四）粗朶による河川工法の事例

河川工法に用いる天然材料は、七世紀に草本から粗朶に代わっていくようです。

①津寺遺跡

七世紀に粗朶が河川工法の定番になった例として岡山市北区の津寺遺跡の堤防を挙げます。飛鳥時代に造られた護岸施設は、足守川の旧流路に沿って杭列や盛土施設（長さ六一・四m、高さ一・八m）で、現代の低水路護岸でした。

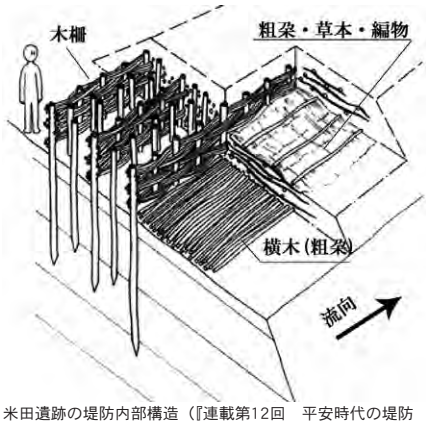
護岸法面は、草本と樹皮を何層にもわたり張り付け、護岸の中心には何千本も杭を打ち込み、護岸背後の越流による洗掘部は、粗朶を何層にも敷設していました。

②米田遺跡

岡山市百間川の米田遺跡では、平安時代後半期の堤防が出土しました。

堤防は長さ約四〇m、敷幅約六m、高さ約一・二mで、七から八列の列をなした直径八cm前後の縦杭の間を縫うように直径三cm前後の横木が敷き詰められ、横杭をS状に編んだ柵が造られており、この工法は、「河川伝統工法」の「柵工」と同じです。

堤防盛土の中には、厚さ四〇cmに一二枚の草本類の層が確認され、これらの草本類はそれぞれ縦方向、横方向、斜め方向と向きを違え、また格子状に編んだり、撚り紐で簾状に編んだ編物（蓆状）もありました。

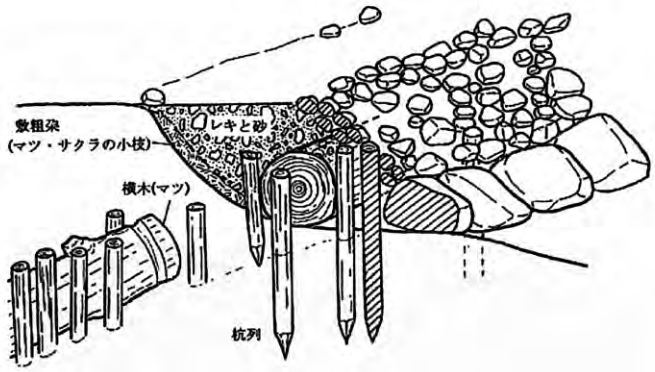


米田遺跡の堤防内部構造（『連載第12回　平安時代の堤防調査日誌』岡山県古代吉備文化財センター　物部茂樹）

③関津遺跡

大津市関津町の関津遺跡で、瀬田川に臨む長さ約二一mの室町時代の護岸施設が出土しました。この護岸は、主に杭（直径一〇cm、長さ一m前後）と横木（最大径約五〇cmの松、長さ約六・三mと四m）で基礎を造り、直径二から三cm以下の小枝を一〇cm程度の厚さに敷き詰めた敷葉工法で傾斜面を保護していました。さらに、杭列の川側に一m×〇・五m程の岩石を一から二段並べて、杭列と横木を砂礫で覆い、表面にはこぶし大の石を並べていました。つまり、杭と横木と岩石は根固め工、法面の粗朶と砂礫は法覆い工でした。

この他、東海近辺の遺跡として、例えば、①岐阜県可児市の弥生時代末から古墳時代初めの柿田遺跡で、杭や横木を芯に草本を敷設しながら盛土を行い、表面から草本や杭を留めるための小杭を打ち込んだ護岸施設や堤防、②東赤坂駅から北東約一kmの、平安時代末から鎌倉時代初頭の北方京水遺跡から敷葉工法による二基の堰が出土しています。



関津遺跡の護岸工の図（『港の護岸施設を検出』より）

四、おわりに

中国や韓国での土構造物に用いられた敷葉工法が、わが国の土塁や堤防などの構築に用いられた経緯を概観しました。さらに、稲作が伝わるにつれ、灌漑水路への取水用の井堰が「水制の働き」を期待して設置されたことを知りました。

本編の内容は、今後さらなる調査と検討が必要ではありますが、稲作が伝わった弥生時代頃から、人々が川と密接に関わってきたことを伝えるものです。

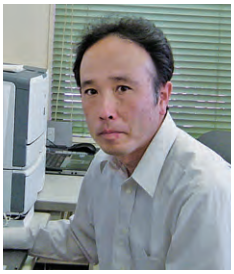
■参考文献

古代築堤における「敷葉工法」
工楽善通　奈良国立文化財研究所創立四〇周年記念論文集　平成七年
古代と現代の治水
小山田宏一　河川文化（その三五）日本河川協会　二〇一一年
狭山池ダム・古代の堤体が語る土木技術史について
金盛弥、古澤裕、木村昌弘、西園恵次、土木史研究　第二五号　一九九五年
発掘された河川と池の堤防
畑大介　治水・利水遺跡を考える第七回東日本埋蔵文化材研究会　第二分冊　一九九八年
東アジアの中の狭山池
小山田宏一
狭山池の誕生をさぐる
大阪狭山市教育委員会
吹田市五反島遺跡発掘調査報告書　遺構編
吹田市教育委員会　二〇〇二年

研究資料

故郷を愛した漢詩人　服部擔風

弥富市教育委員会　生涯学習課
歴史民俗資料館　学芸員
伊藤 隆彦



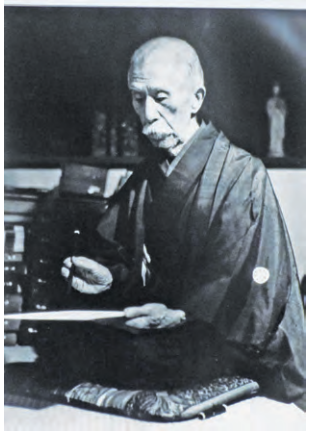
伊藤隆彦

1965年生まれ
愛知教育大学教育学部卒業
昭和63年より愛知県埋蔵文化財センター
平成３年より弥富市歴史民俗資料館勤務

共著
「新編立田村史通史」
「フィールドサイエンス　地球の不思議探検　東海版」
「フィールドサイエンス　いきいき！生き物観察ガイド　東海版」

はじめに

明治・大正・昭和の三代にわたって日本の漢詩壇に多大な功績を残した服部擔風（一八六七―一九六四）は、九六年の生涯を故郷弥富で過ごし地域の人々に親しまれてきました。地元に佩蘭吟社、清心吟社などの漢詩の結社を起こし、自ら漢詩文の講義や添削指導を精力的に行いました。また、書家としても知られ、弥富市近隣の多くの家庭にその書が残されています。



服部擔風

擔風の漢詩は森春涛・槐南の影響を受け、情韻ともにすぐれた詩風は春涛に最も近いと賞賛されています。清朝詩の研究でも知られ、繊細で巧みな技巧や表現に、新鮮な感覚を取り入れた詩風は、高い評価を得ています。特に昭和二二（一九四七）年に刊行した『擔風詩集』（全七巻）で日本芸術院賞を受賞し、漢詩人として全国的に知られることになりました。生涯で指導した結社は全国四〇社以上に及ぶなど、わが国の漢詩の発展に大きな役割を果たしました。

擔風という人

擔風は、幕末の慶応三（一八六七）年、鯏浦村（弥富市鯏浦町）の服部家の次男として生まれました。学校教育を受けたのは明治八（一八七五）年から濯習学校での四年間だけでしたが、幼いころから七歳上の兄とともに自宅で教育を受け、特に月に数回、父が自宅に招いて講義を受けた森村大朴には大きな影響を受けたようです。青年期までに漢学、詩学、国文学など幅広い学問を修養しました。二〇歳のころ、末松謙澄に東京で官吏に就くよう勧められましたが、これを辞退したと伝えられています。弥富市総合社会教育センター前の詩碑に、

臺閣功名画餅如
操持幸未負當初
白鴎春水忘機久
我亦蘇江一老漁

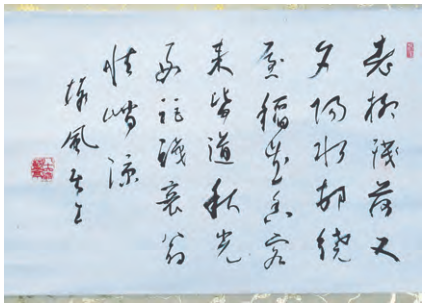
台閣の功名画餅の如し
操持幸いに未だ当初に負かず
白鴎春水忘機久し
我もまた蘇江の一老漁

漢詩碑

（大意　国政に参与して名声を上げることは私の人生には何の価値もない。功名を求めぬ生き方を決めてからここまで、自分を裏切ることなくこられたことを幸せに思う。春の水に浮かぶ白いカモメたちとの長い付きあい。私はやはり木曽川べりに住む年老いた漁夫のようにあるのがこの身にもっともふさわしい。）

とあるように、昭和三九（一九六四）年に亡くなるまでの九六年間を弥富で過ごし、常に詩作に励んだことから、残された詩は膨大な数に及んでいます。

擔風は、本名を「粂之丞」といい、名は「轍」、字は「子雲」を名乗っていました。号は「擔風」のほか「酔芙蓉軒」「藍亭」「蘇塘」「秋鵑」などがあります。「藍亭」は明治三五（一九〇二）年に建てられた擔風の書斎の名でもあります。『踏青夜


七言絶句

話』によると、中国の王義之の「蘭亭」を模したもので、自宅から西に見える鈴鹿の山々の景色を、「西山は清暁の如くして霏藍翁黛の中　時に爽気あり」という謝眺の詩を評した「竹林詩評」の一節と重ね合わせ「藍」の文字をとったとあります。

明治三九（一九〇六）年に藍亭を訪れた王治本も藍亭からの景色が気に入り「藍亭記」を記したといいます。

詩人としての擔風

擔風は、とりわけ木曽三川や鈴鹿、養老の山々の風景を好み、この地域の風物や身近な情景を巧みな表現で漢詩に残しています。擔風が愛した故郷の風景を詠んだ詩をいくつか紹介します。

三間茅屋控平田
宿雨放晴山翠鮮
得看分秧前後景
一年一度水如天

三間の茅屋は平田を控え
宿雨晴を放ちて山翠鮮やかなり
看るを得たり分秧前後の景
一年一度水天の如し

（大意　三間ほどの狭い茅葺きの書斎は、広々とした田を控えている。長雨に洗われてきれいに晴れた空の向こうに養老の山々の翠が鮮やかである。今年も田植え前後のよい景色を見ることができる。田に満ちた水が天を映すのは一年に一度だけである。）

擔風の書斎「藍亭」からの田植えのころの景色を詠んだ詩で、晩年の昭和二八（一九五三）年の作です。狭い書斎と一面に広がる水田との対比や、西の山々の景色を鮮やかに表現しています。

老柳残荷又夕陽
水邨繞屋稲花香
客来皆道秋光好
訌識衰翁怯峭涼

老柳残荷また夕陽
水邨屋を繞って稲花香し
客来って皆いう秋光好しと
なんぞ識らんや衰翁が峭涼を怯るを

（大意　柳や蓮の葉が枯れる秋の夕陽、屋敷をめぐる水郷に稲の香りがする。客はみな秋の風景は好ましいというが、衰えていく私が秋の物寂しさにおびえているのを知っているだろうか。）

秋の物寂しい水郷の風景に自身の心情を織り交ぜて表現しています。擔風の詩には「稲花香」の語句がたびたび用いられています。

近如錦綺遠雲霞
照映長江橋路斜
誰識我郷新楽事
清明春市祭桜花

近くは錦綺のごとく、遠きは雲霞
長江に照り映えて橋路は斜めなり
誰か我が郷の新たなる楽事を識らんや
清明の春の市に桜花を祭る

（大意　近くは錦のあやのように見え、遠くは雲か霞のように見える。一帯の桜は木曽川の水に姿を写し照り映えている。尾張大橋に通じる道が桜の中を斜めに走っている。故郷の新しい楽しみとなった清明のころに行われる桜祭りに春の市が立っている。）

この詩は昭和二七（一九五二）年作の「弥富雑詩」と題された故郷を詠んだ春の詩の一つです。擔風の長孫である服部靖（承風）氏は著書『藍亭詩意』の中で、桜祭りという通俗的な題材を詩にできるのは擔風の技巧のすぐれたところであり、故郷に常に愛情の眼を注いでいるからだと紹介しています。

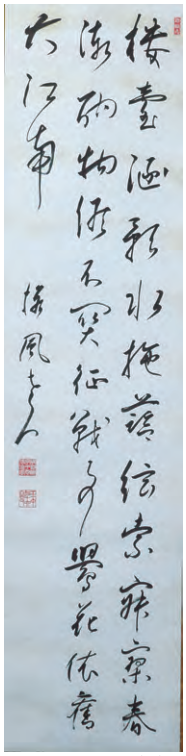
吟侶尋春赤渚頭
桃青碑古水悠悠
他年阮屐能餘幾
毎喫白魚思俊遊

吟侶と春を尋ぬ　赤渚の頭
桃青の碑古く　水悠々
他年阮屐能く余り幾ばくぞ
白魚を喫する毎に俊遊を思う

再建された芭蕉句碑

（大意　漢詩の仲間と春を尋ねて揖斐川河口の水辺にやってきた。芭蕉の白魚の句碑は古く、水は悠々と流れている。長い年月が経っても、消えることのない芭蕉のすぐれた功績に、白魚を食べるたびに思いを馳せるのである。）

この詩は揖斐川河口の桑名市地蔵堂で昭和六（一九三一）年三月二九日に作られました。当時ここには松



桑名途上

尾芭蕉の俳句「明ぼのや　しろ魚白き事一寸」の碑がありました。句碑は伊勢湾台風で流失し、現在の碑は再建されたものです。白魚は桑名の春の風物です。

楼臺涵影水拖藍
絃策寂寥春漸酣
物候不関征戦事
鶯花依舊大江南

楼台影を涵して水藍をひく
絃策寂寥春漸く酣なり
物候は関せず征戦の事
鶯花旧に依る大江の南

（大意　藍色の水面に楼台が影を映している。琴や三味線の音もなく寂しいが春は真っ盛りである。季節は戦時にはまったく関係なく、鶯が鳴き、花が咲く昔のままの木曽三川の南の風景である。）

戦時中の昭和一七（一九四二）年、桑名で毎月開催された「詩国吟社」の例会で作詩され、「桑名途上」と題されています。既に尾張大橋、伊勢大橋は開通していましたが、おそらく鉄道で弥富から桑名に通っていたのでしょう。その途上の情景です。

丹雘祠堂尚儼然
祭儀壮麗世喧伝
涼如水夜人如海
月満江天燈満船

丹雘の祠堂　尚儼然
祭儀壮麗にして　世に喧伝す
涼　水の如き　夜は人海の如し
月は江天に満ち　灯は船に満つ

（大意　丹塗りの津島神社は厳かで、祭りの儀式は壮麗で世に知れわたっている。川祭りは涼しく、夜は人が海のようである。天王川の上には月が満ち、まきわら船にはたくさんの灯火が満ちている。）

津島祭の宵祭を詠んだ詩で大正一三（一九二四）年の作です。絵は名古屋の日本画家小野寺梅丘の筆によるものです。擔風は、画家との交流も多く、この作品のように賛を寄せています。自身も水墨画を嗜み、梅や蓮、菊、蘭といった自画賛を数多く残しています。

また、擔風は漢詩だけでなく和歌にも長けていました。

魚の名のうぐひ（鮴）のさとに老い果てん
うき世の波にうきしづむとも

故郷の地名「鮴浦」にかけて「う」の母音を繰り返す軽妙な歌ですが、晩年、伊勢湾台風に遭い、一時弥富を離れたこともあって、擔風の和歌には故郷への思いが強く現れた作品が多くあります。

おわりに

最後に、『藍亭詩意』（前出）の中で祖父擔風と故郷への思いについて述べた承風氏の一節を引用し、拙稿を締めたいと思います。

「ややもすれば、一つの村に特有の美しさ、その町だけがもつ味わい、そんな特異なすばらしさをわたしたちは見失っていることが多い。どこの村へいっても同じように思えたりする私たちの日常性に慣れすぎた眼は、すでに故里の美しささえ、はっきりととらえることができなくなっているのではないだろうか。そうだとしたらわたしたちは、なんと貧しい毎日を送っていることだろう。豊かな風景ひとつ、豊かに感じられない悲しさ、翁のうたう弥富の詩を読むと、わたしは、とたんに、わたしのふるさとの美しさに、いまさらながらハッとすると同時に、知らず知らずのうちに貧しい心になり果てている自分を反射鏡にでも投影されたかのように、鮮明に感知する。」

津島祭図賛

※注釈

森春濤　一宮出身の漢詩人。「新文詩」、「東京才人絶句」を刊行し、明治詩壇の大家となった。

森槐南　古注学者・漢詩人で、森春濤の子。宮内大臣秘書官・式部官を歴任した。

王治本　中国清朝の文人。明治時代に来日、日本各地を訪れ漢詩文の指導をした。

■参考文献
『藍亭詩意』　服部靖　一九五六年
『担風絶句選解　下』　冨長蝶如　現代漢詩人選書　一九六〇年
『踏青夜話』　大島静雄編　一九九一年
『服部担風先生雑記』　冨長蝶如　二〇〇〇年
『やとみ文学散歩』　弥富文学研究会　二〇〇〇年

おわんふきがま

（瑞穂市重里）

むかしは、五六川のそばには、たくさんのがまがありました。村の人たちは、その水で米を作っていましたが、暮らしは貧しいものでした。

村はずれに住む老夫婦も、お祭りに使うおわんを買うお金がないので困っていました。

おじいさんは、となりの村の知り合いの家まで、おわんを借りに行きましたが、そこにも貸すだけのおわんは揃っていません。

困ったおじいさんは、村ざかいのがまのほとりで座りこんでしまいました。

おじいさんは水に写った自分の影にむかって、「おわんがないとお祭りができん。誰かおわんを貸してくれれば助かるのだが」とひとりつぶやきました。

次の日も、おじいさんはあちこちの知り合いの家を頼んでまわりましたが、おわんを借りることはできませんでした。困ったおじいさんは、途方にくれて歩いているうちに、きのうと同じがまのほとりに来ました。その水面を見ていると、おわんがいくつも浮かんで流れてきました。おじいさんは、たいそう喜び、おわんを借りて帰りました。

お祭りが終わってから、おじいさんは、おわんをきれいに洗って、お礼を言ってがまに返しました。この話を聞いた村人のひとりが、おじいさんにならって、がまからおわんを借りました。ところが、返すときにいくつか自分のものにして、数が足りないまま返してしまいました。

それからは、がまに行っておわんを借りようとしても、おわんは出てこなくなりました。

木曽川文庫利用案内

ヨハニス・デ・レイケに関する文献など約4,500点の図書などを収蔵、木曽三川の歴史を知るために、多くの方々のご利用をお待ちしています。

船頭平閘門
木曽川文庫

《開館時間》
午前8時30分～午後4時30分

《休 館 日》
毎週月・火曜日(月・火曜日が祝祭日の時は翌日)・年末年始

《入 館 料》無料

《交通機関》
国道1号尾張大橋西詰から車で約10分
名神羽島I.Cから車で約30分
東名阪長島I.Cから車で約10分

KISSOホームページ
http://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/KISSO/index.html

Johannis de Rijke の日本語表示については、かつては「ヨハネス・デ・レーケ」と呼ばれていましたが、「KISSO」では、現在多く使われている「ヨハニス・デ・レイケ」と表記しています。

木曽川文庫へのお問い合わせは
〒496-0946 愛知県愛西市立田町福原
TEL.0567-24-6233 FAX.0567-24-5166
Mail sendouhi@dream.ocn.ne.jp

編集後記

歴史記録は、今号より４回に渡り、木曽三川に造られた水制工の歴史的経緯や役割について連載します。

なお、この資料は、創刊号からの全てが木曽川下流河川事務所ホームページよりダウンロードできます。

表紙写真

上
「小簾紅園」
文久元（1861）年、皇女和宮親子内親王が中山道をご降嫁された際に、呂久の渡しを利用され和歌を詠まれました。
このことを記念し、昭和４（1929）年に歌碑と呂久の渡し跡を含め、公園として整備されました。

下
「揖斐川」
瑞穂市古橋と呂久間で揖斐川を渡る鷺田橋より下流を望む。
この辺りの揖斐川は大きく湾曲していたため、木曽川上流改修工事（大正改修）で新河道を開削したため、直線的な河道となっています。

『KISSO』Vol.95 平成27年7月発行

編　集　木曽三川歴史文化資料編集検討会（桑名市、木曽岬町、海津市、愛西市、弥富市ほか）

発　行　国土交通省中部地方整備局木曽川下流河川事務所調査課
〒511-0002 三重県桑名市大字福島465
TEL（0594）24-5715 ホームページ URL http://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/